沖縄県立埋蔵文化財センター
OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER

発掘調査速報展 2017

沖縄県立埋蔵文化財センター
2017年8月1日㊋▶9月3日㊐

恩納村博物館
2018年1月16日㊋▶2月4日㊐

宮古島市総合博物館
2018年2月16日㊎▶2月25日㊐

目　　次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
平成28年度 発掘調査実施箇所一覧・・・・・・・・・・・・・2
旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区（宜野湾市）・・・・4
大嶺村跡（那覇市）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
県営首里城公園内 真珠道跡（那覇市）・・・・・・・・・・13
円覚寺跡（那覇市）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
県営首里城公園内 中城御殿跡（那覇市）・・・・・・・・・19
白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）・・・・・・・・・・・・・22
藪地洞穴遺跡（うるま市）・・・・・・・・・・・・・・・・26
ツヅピスキアブ（宮古島市）・・・・・・・・・・・・・・・30
県内出土遺物保存処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
沖縄歴史年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
発掘調査のきっかけ（契機）とは・・・・・・・・・・・・・36

表紙写真

- 大嶺村跡
- 円覚寺跡
- 藪地洞穴遺跡
- 旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区
- ツヅピスキアブ
- 県営首里城公園内 中城御殿跡
- 白保竿根田原洞穴遺跡
- 県営首里城公園内 真珠道跡

凡 例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報展 2017」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製及び転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚、集落跡、グスク、近世墓など約4,500カ所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人たちが残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄県の歴史・文化の解明や研究に役立てています。

通常、発掘調査が始まってから、土器や石器などの出土遺物を整理し、報告書を刊行するまでには数年の歳月を必要とします。そこで当センターでは最新の成果をいち早く、県民をはじめとする多くの方々に見ていただきたいとの思いから、前年度の発掘調査の内容を「発掘調査速報展」として毎年公開しています。

今回は、新たな試みとしてうるま市教育委員会と宮古島市教育委員会がそれぞれ発掘調査をおこなった「藪地洞穴遺跡」、「ツヅピスキアブ（丘陵頂上部近くを貫通する洞穴）」を含め、県内8地区の発掘調査について、出土遺物や写真パネル（ただし、石垣市「白保竿根田原洞穴遺跡」は、写真パネルのみ）などを通して紹介します。

また、昨年度は首里城跡正殿地区から出土した金属製品の保存処理も実施しています。そこで、保存処理に加え、錆等の除去や欠損部を修復した金属製品も展示することにしました。

当センター等が行った発掘調査及び保存処理を通して、多くの方々が遺跡や遺物などに接し、先人たちの暮らしに想いを馳せるとともに、沖縄の歴史と文化に対して親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

平成29年8月1日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　金　城　亀　信

平成28年度発掘調査

沖縄本島

旧キャンプ瑞慶覧
西普天間住宅地区〔宜野湾市〕
グスク時代～近代

大嶺村跡〔那覇市〕
近世～近代

県営首里城公園内
中城御殿跡（旧県立博物館）〔那覇市〕
グスク時代～近代

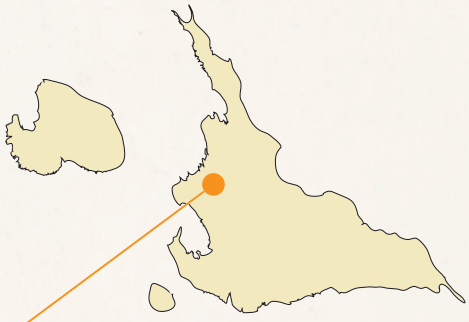
県営首里城公園内 **真珠道跡**〔那覇市〕
グスク時代～近代

藪地洞穴遺跡〔うるま市〕
縄文時代～弥生から平安並行期

円覚寺跡〔那覇市〕
グスク時代～近代

実施箇所一覧

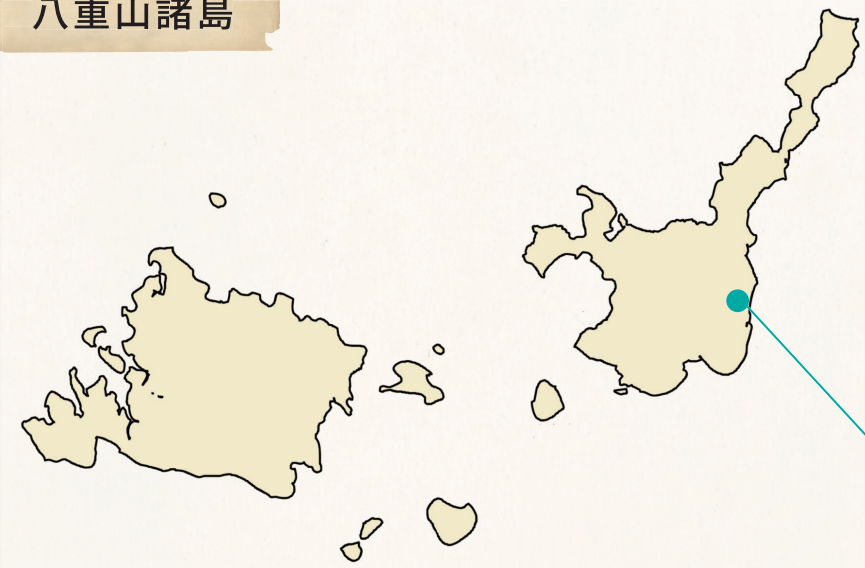
宮古諸島



ツヅピスキアブ〔宮古島市〕

旧石器時代（後期更新世）～近世

八重山諸島



白保竿根田原洞穴遺跡〔石垣市〕

旧石器時代（後期更新世）～中森期（グスク時代）

旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区

グスク時代 ～ 近　代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

平成 27（2015）年 3 月 31 日に返還された旧キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区の跡地利用に伴い、文化財の適切な保護・活用のため埋蔵文化財の有無や遺跡の範囲を把握する目的で、平成 27（2015）年度から宜野湾市の依頼を受けて同地区の調査に参加しています。

平成 28 年度は、宜野湾市教育委員会の分布調査で確認されている喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第三遺跡、喜友名山川原第七遺跡、喜友名西原遺跡、喜友名古水田跡などの範囲や内容を把握するため、試掘調査及び確認調査を行いました。

調査の方法

試掘調査は、西普天間住宅地区を東西南北に 30 × 30 mで区切ったグリッドを基準に、希少な植物が群生する場所を避けて設定した 4 × 4 mもしくは、2 × 3 mの試掘坑 40 カ所について実施しました。試掘調査後は、遺跡の広がりを把握するため、遺構や遺物が確認された試掘抗を広げてトレンチを設定し、確認調査を実施しました。その結果、以下の成果を得ることができました。

調査の成果

調査の結果、喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第三遺跡、喜友名山川原第七遺跡の範囲に含まれる試掘坑及びトレンチで、近世～近代からグスク時代にかけての遺物や遺構が見つかりました。

近世～近代の成果としては、沖縄産の陶器や国内外の陶磁器類のほか、近代の耕作に関係すると考えられる溝跡や堆積層を確認することができました。

グスク時代の成果としては、建物の柱跡や土器、徳之島産カムィヤキ、中国産の白磁や青磁、長崎県産の滑石製石鍋の破片、鉄滓などを確認しました。特に、喜友名下原第二遺跡では、試掘調査で建物の柱跡が確認されたことから、試掘坑を広げて確認調査を実施しました。その結果、柱跡の広がりが認められただけでなく、炉跡や県内でも類例が少ない円弧状の遺構、柱跡内に土器がまとまって廃棄された状況が確認され、大きな成果を得ることができました。

Data

事業名　基地内文化財分布調査　所在地　宜野湾市西普天間住宅地区（旧キャンプ瑞慶覧）

調査面積　〔試掘調査〕試掘抗 40 カ所（281㎡）〔確認調査〕トレンチ 4 カ所（483㎡）

調査期間　〔試掘調査〕平成 28（2016）年 7 月 1 日～ 9 月 4 日〔確認調査〕同年 9 月 5 日～ 12 月 8 日

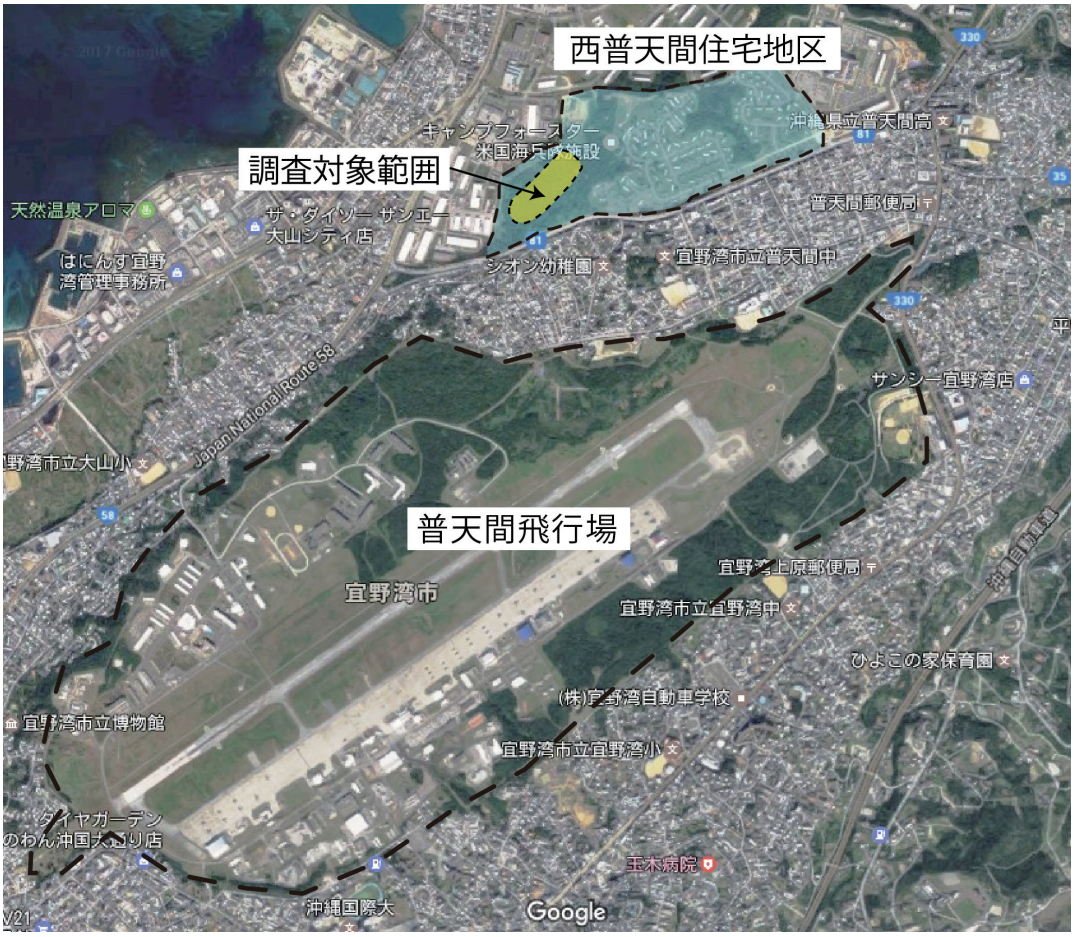


図１　西普天間住宅地区と調査実施箇所の位置

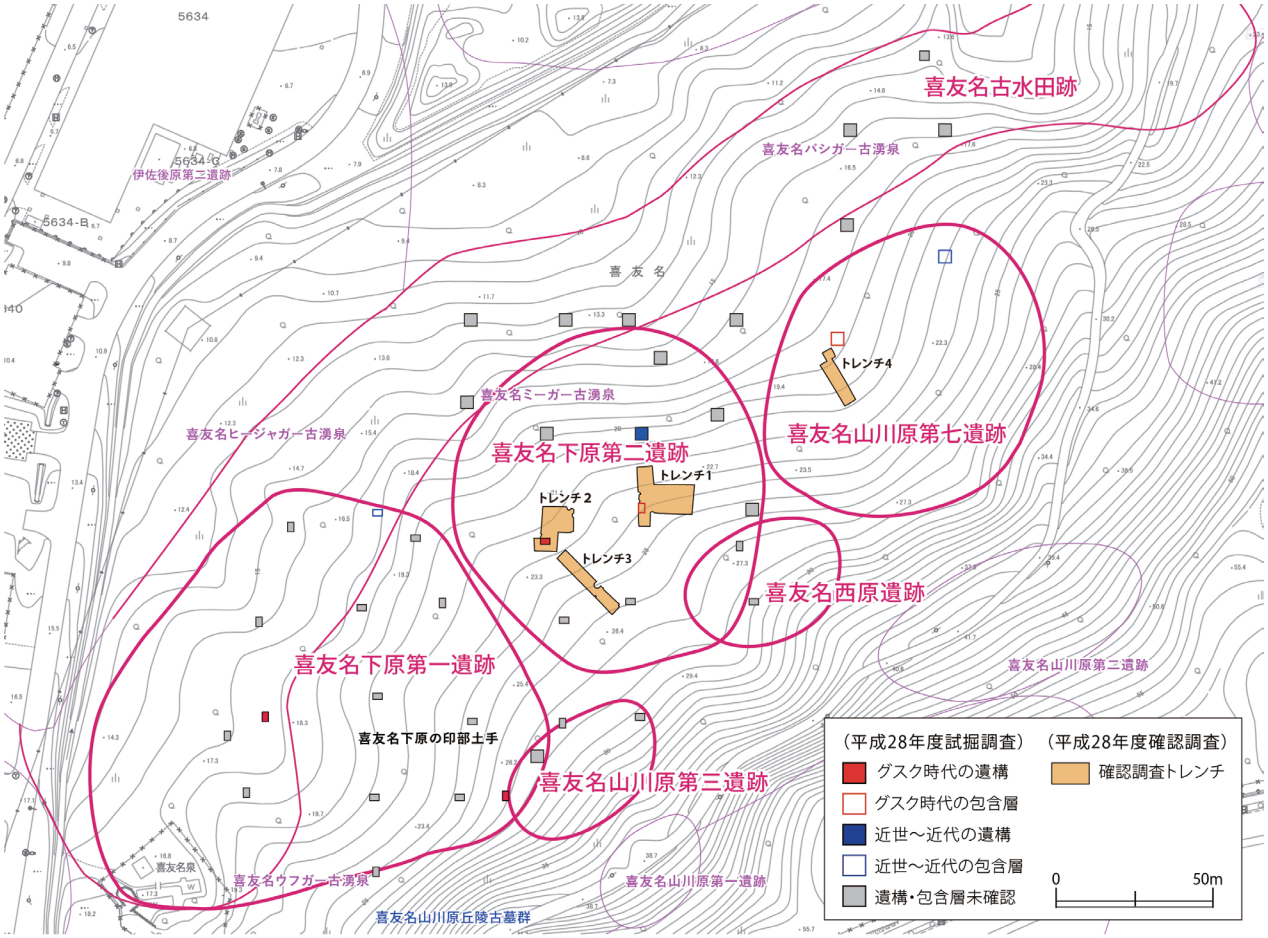


図２　平成 28 年度　試掘調査及び確認調査実施箇所

写真１　喜友名下原第二遺跡　建物の柱跡（トレンチ１）

写真２　喜友名下原第二遺跡　円孤状の遺構（トレンチ２）

写真３　喜友名下原（きゆなしちゃばる）第二遺跡　柱穴内への土器廃棄状況（トレンチ１）

写真４　喜友名下原（きゆなしちゃばる）第一遺跡　建物の柱跡

大嶺村跡（おおみねむらあと）

近世～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

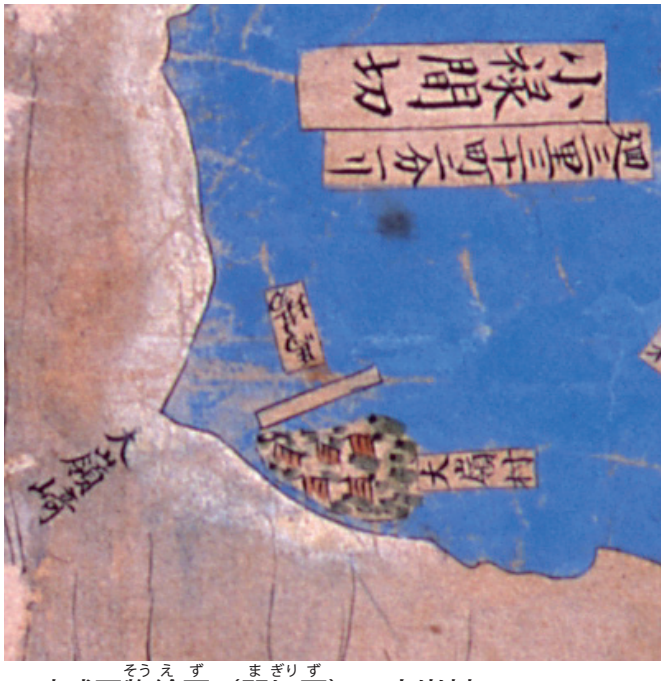
発掘調査の経緯

この調査は、那覇空港拡張（かくちょう）工事に伴う那覇空港事務所管制塔庁舎（かんせいとうちょうしゃ）新築工事等に先立ち、建設予定箇所に存在する埋蔵文化財の発掘調査を行ったものです。那覇市文化財課が事前に行った試掘（しくつ）調査によって、この場所には戦前まで所在していた大嶺村の遺構が残されていることが分かっています。

発掘調査実施箇所と地区名

大嶺村の歴史

大嶺村は、『琉球国由来記（りゅうきゅうこくゆらいき）』（1713 年）や、冊封副使の徐葆光（じょほこう）が残した『中山傳信録（ちゅうざんでんしんろく）』（1721 年）に記録されています。明治になると小禄間切（おろくまぎり）大嶺村から小禄村字大嶺となり、昭和には旧日本軍小禄飛行場が建設されました。戦後は米国民政府管理の那覇飛行場、本土復帰後は那覇空港として利用され、現在に至っています。

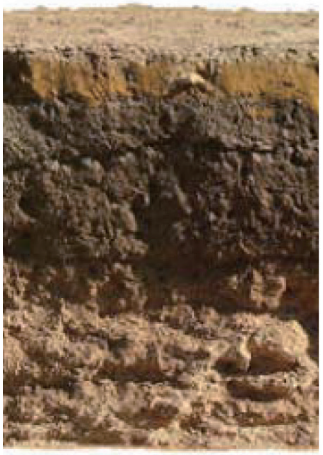


琉球国惣絵図（間切図（まぎりず））の大嶺村（1750 年頃）
（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

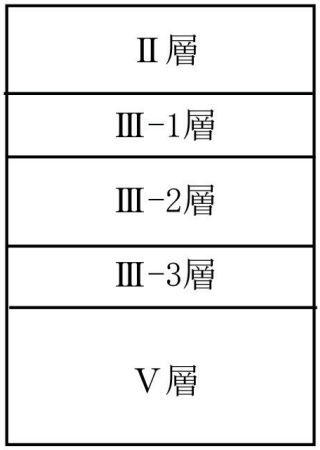
大嶺集落と小禄飛行場（1945 年 1 月 3 日）
（国土地理院所蔵）

Data
目的　那覇空港管制塔庁舎新築 及び ケーブルダクト設置に伴う記録保存調査　調査面積　約 3000㎡
所在地　那覇市小禄大字大嶺（那覇空港内）　調査期間　平成 28（2016）年 3 月 1 日～7 月 20 日

管制塔Ⅰ地区の調査成果



土層堆積状況



土層模式図

管制塔Ⅰ地区では、大嶺村の遺構が作られた海浜堆積物層（Ⅴ層）の上に、炭や多量の遺物が含まれた戦後直後とみられる黒色の砂層（Ⅲ層）が堆積しています。その上には米軍那覇飛行場から本土復帰後の那覇空港時代の造成土（Ⅱ層）や空港内の道が確認されました。

管制塔Ⅰ地区では、最下層の海浜堆積物層から大嶺村のものとみられる遺構が検出されました。遺構には、方形に区画された溝や、集落の外れにウマやブタの幼獣を埋葬した土坑などが確認されました。中でもウマは、体高から在来馬ではない種類とみられる点で注目されます。

溝　跡

ウマが埋葬された土坑

ブタ幼獣が埋葬された土坑

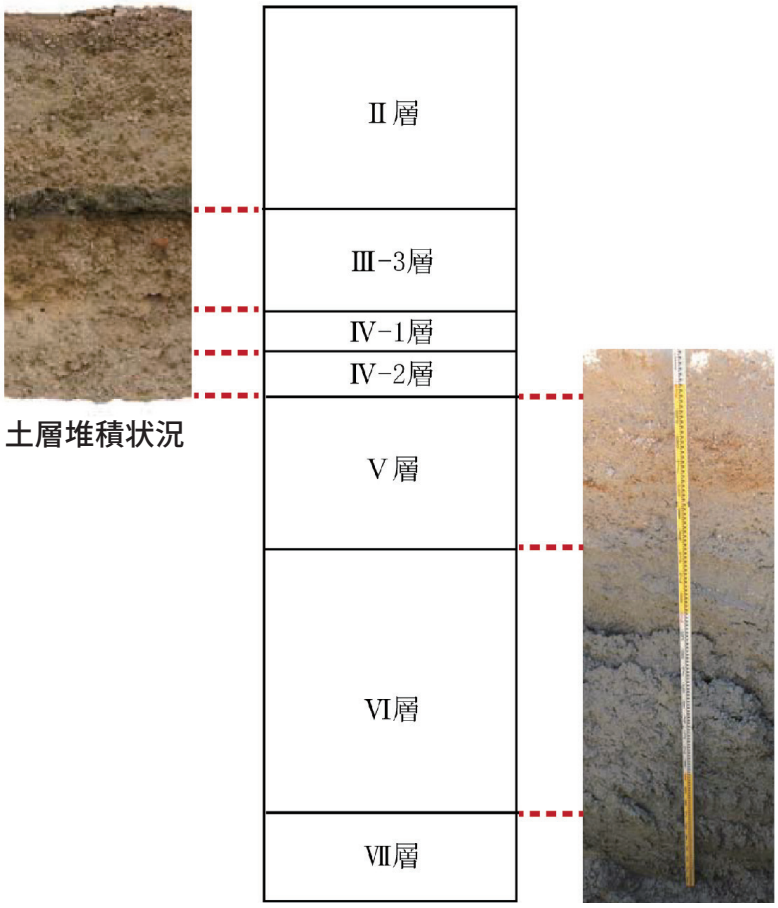
管制塔Ⅱ地区の調査成果

管制塔Ⅱ地区では、約2.7m下まで戦後から現代にかけての造成土が厚く堆積していました。その下には自然に堆積した海浜堆積物層や、琉球石灰岩が確認されました。この地区から遺構は確認されませんでしたが、造成土からは近世・近代の遺物が現代のものに混ざって出土しています。

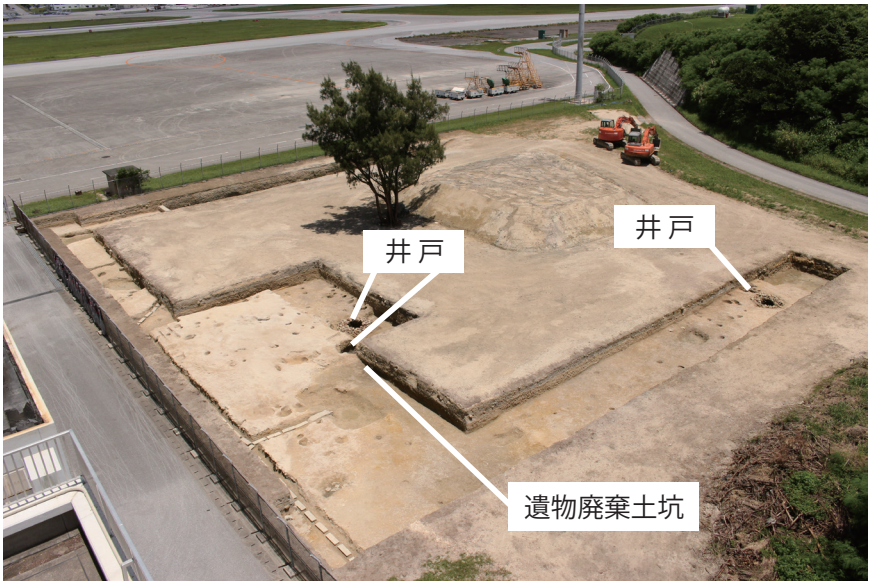
エプロン地区の調査成果

エプロン地区では、島尻泥岩（しまじりでいがん）層（Ⅶ層）が基盤で、その上に灰色の海浜堆積層（Ⅵ層）、海浜堆積層及び白砂層（Ⅴ層）が堆積します。その上に遺構のある粗砂（あらすな）層（Ⅳ層）が確認されました。

その上は管制塔Ⅰ・Ⅱ地区と同じように、戦後直後とみられる層（Ⅲ－3層）、戦後から那覇空港時代の造成土層（Ⅱ層）や建造物がみられます。



土層堆積状況　土層模式図　土層堆積状況



エプロン地区では、大嶺村の時期とみられる多数の柱穴跡や礎石の抜け穴などが確認されました。特に狭い範囲に３基も検出された井戸や遺物廃棄土坑、集石遺構などが注目されます。

エプロン地区では、約 500㎡内に３基の井戸が発見されました。そのうち、右下写真の井戸は、Ⅳ -1 層で埋められ、かつ構造も異なっていますので、上の２基より古い可能性があります。

様々なゴミを捨てた穴（遺物廃棄土坑）も見つかりました。この中には沖縄や日本で作られた様々な種類の陶磁器や、ブタの骨や貝殻などの食糧残滓（ざんし）が含まれています。

出土した遺物

先史時代の土器

中国産青磁（グスク時代）

遺物廃棄土坑から出土した主な遺物

「陸軍第四十五聯隊酒保」銘 歯ブラシ柄

稲モミが混入した
瓦質土器製の焜炉

貝殻圧痕が残る壺

県営首里城公園内 真珠道跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成 28(2016) 年に「真珠道跡」の発掘調査を実施しました。今回の調査では、戦前まであった真珠道の跡とこれに隣接する国王頌徳碑の範囲・状況を確認することを目的としています。この調査成果は今後の首里城公園の整備のための基礎資料となります。

真珠道について

真珠道は尚真王代 (1477 ～ 1527) に首里王府によって整備された道です。真珠道は石敷きで、当初は首里から真玉橋 (現在の豊見城市) までの約 4 km が整備されましたが、その後 1553 年には那覇港 (現在の住吉町) まで延長され、約 8 km の石畳が続いていました。

真珠道が整備された理由は、当時東アジア各地で猛威を振るっていた倭寇への対策だったとされています。尚真王は那覇港に倭寇が来襲した際には兵を派遣し、南風原、豊見城の真玉橋を通り那覇港の南側 (垣花) へ向かわせたと真珠湊碑文に記されています。

国王頌徳碑について

国王頌徳碑（建立 1522 年）は尚真王の功績が記された石碑で、真珠道の東側にあったことから石門之東之碑文とも呼ばれていました。碑文には尚真王の功績として、それまで 100 年以上続いていた国王が亡くなった際の殉死を禁じるなど仁政を施したことが記されています。

国王頌徳碑（左）と真珠湊碑（右）
（現在は、復元された碑が首里杜館の前に設置されている）

Data

目 的 遺構の範囲確認調査

所在地 那覇市真和志町 1 丁目 7 番 1 地先

調査面積 約 71㎡

調査期間 平成 28（2016）年 8 月 1 日～ 10 月 31 日

調査の成果

調査の結果、当初調査区の東側で確認できると想定していた国王頌徳碑と石碑を囲う石積みは、戦後の造成時に壊されており、これらに伴う遺構は確認できませんでした（橙色部分）。

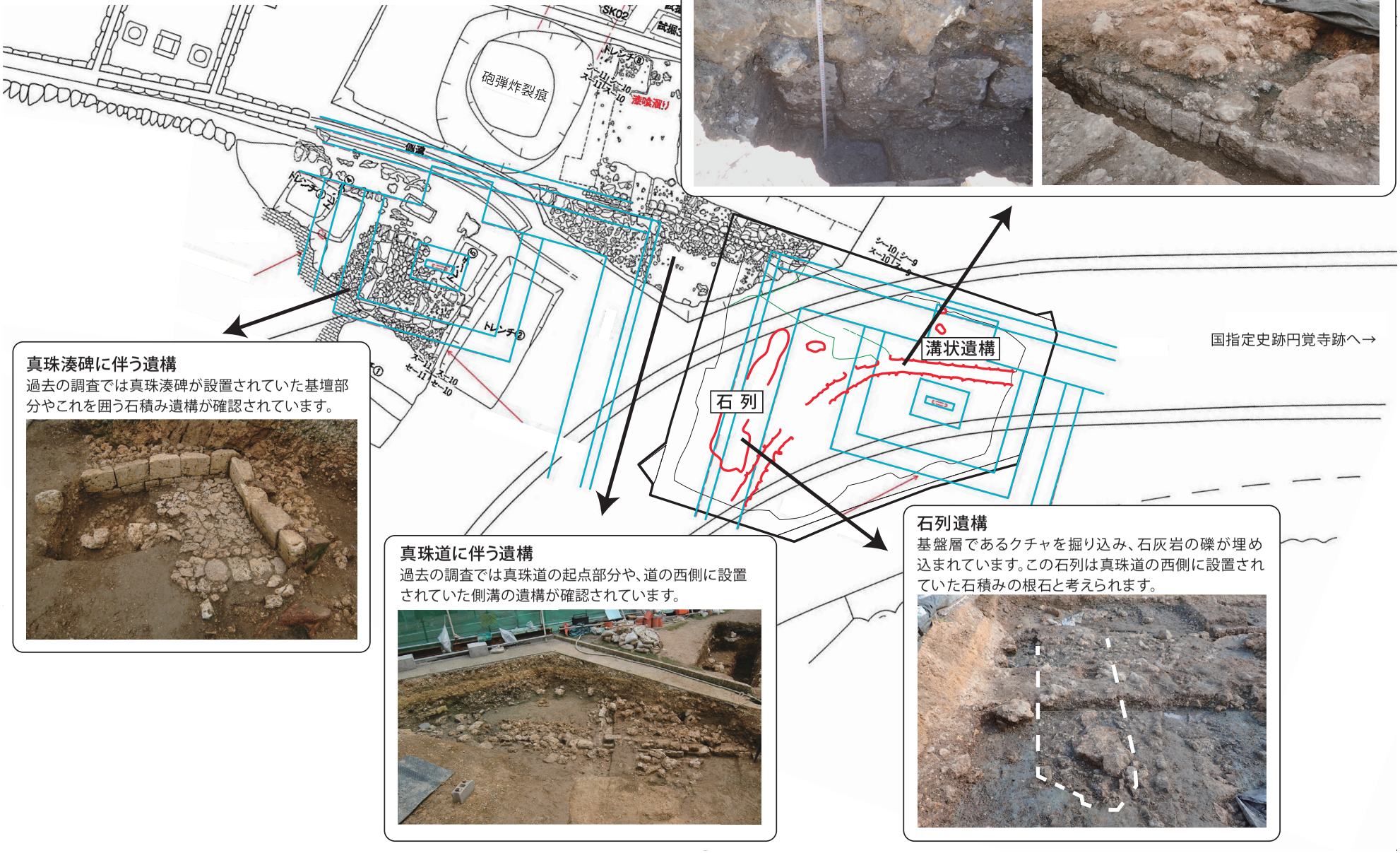
この他、今回新たに溝状遺構を検出しました。溝状遺構も戦後の造成による影響を受けており、石積みの一部が外され水道管が通されていますが、地山に切り石を２段積み上げる様子や堆積の状況から当時は蓋石があった可能性があることが判りました（◯が外された箇所）。遺構の傾斜の様子から、溝状遺構は南からカーブして東へ流れる暗渠であったと思われます。

また真珠道跡に関する遺構として石列遺構を検出しました。検出したのは真珠道の東側にあったとされる石牆の根石部分と考えられますが、その上の石積みは戦後の造成による影響を受けており確認できませんでした。

まとめ

今回の調査では戦後の造成により当初想定していた国王頌徳碑に伴う遺構を確認することができませんでしたが、南から東に向けて延びる溝状遺構、真珠道跡に伴う石牆の一部を確認することができました。これらの遺構の詳細については、今後遺物や堆積状況を整理し検討を行い、真珠道跡及び国王頌徳碑の復元の基礎資料としていく予定です。

調査区遠景（写真下が南）



溝状遺構

切石が２段に積まれており、南から東へ地形に沿って傾斜しています。
この溝状遺構は堆積の状況から当時は蓋が設置された暗渠だったと考えられます。

真珠湊碑に伴う遺構

過去の調査では真珠湊碑が設置されていた基壇部分やこれを囲う石積み遺構が確認されています。

真珠道に伴う遺構

過去の調査では真珠道の起点部分や、道の西側に設置されていた側溝の遺構が確認されています。

石列遺構

基盤層であるクチャを掘り込み、石灰岩の礫が埋め込まれています。この石列は真珠道の西側に設置されていた石積みの根石と考えられます。

円覚寺跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

円覚寺の概要

円覚寺は、1492 年から約 3 年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院です。尚真王（第二尚氏王統第三代）が父親である尚円王の御霊を祀るために建立したと伝えられ、第二尚氏の菩提寺でもありました。現在は国の史跡に指定されています。

かつて円覚寺の境内に数多く存在した建造物は、沖縄戦により首里城とともに破壊されてしまいましたが、平成 9（1997）年度から平成 13（2001）年度にかけて、往時の姿を復元することを目的に遺構確認調査が行われ、建物の基礎遺構や円覚寺の外周を囲う石牆の一部が残っていることが分かりました。その調査成果などを基に、翌年の平成 14（2002）年度からは、石牆の復元整備を実施しています。

調査の成果

平成 28 年度は、かつて存在した三門の復元整備に向けた遺構確認を目的として、発掘調査を行いました。

トレンチ 1 では、三門の基壇の縁石と考えられる石列が見つかりました。この石列は過去の調査で見つかった基壇とつながることより、三門の基壇の規模を知る大きな手がかりとなります。また、石列の片側には段が確認されます。この段は塼を敷くための加工と考えられます。

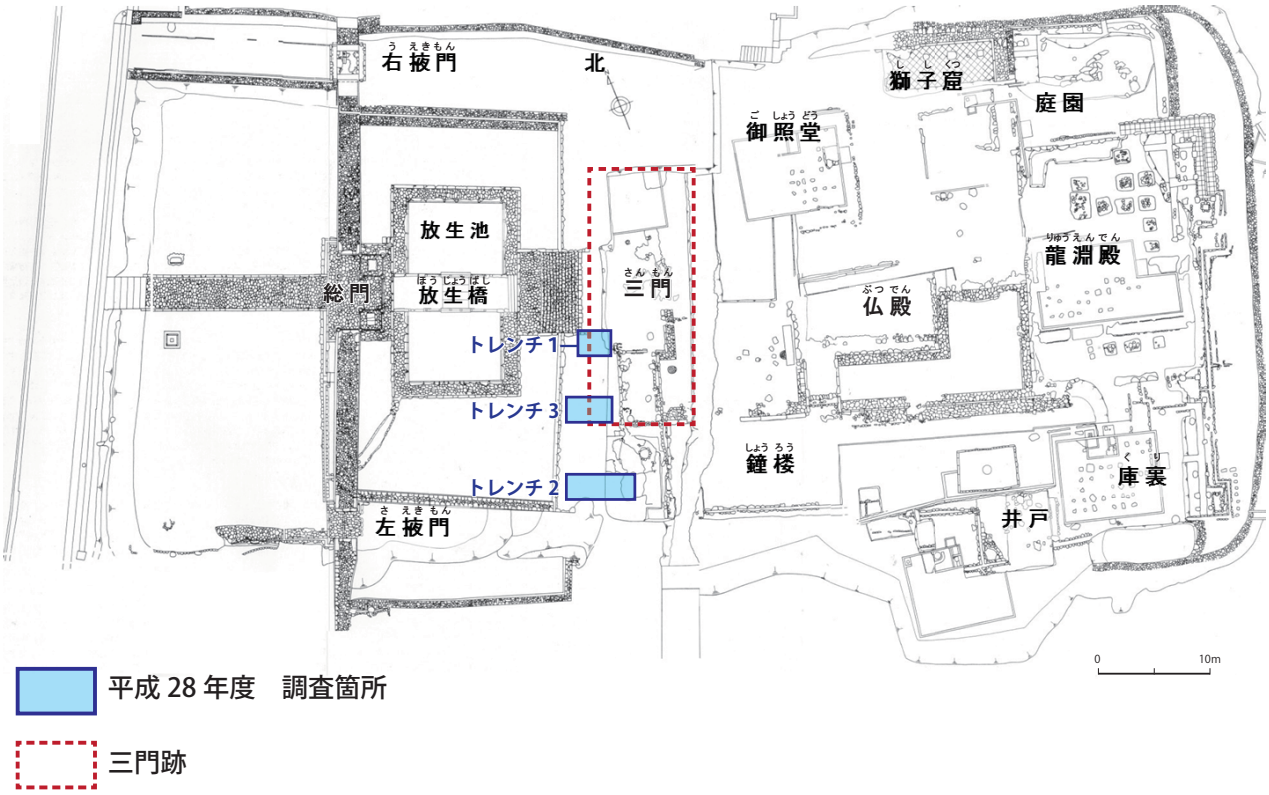
トレンチ 2 では、土留め遺構の検出を想定していましたが、ガラス片などの現代遺物が混じる撹乱の土層が続き、遺構は確認できませんでした。

トレンチ 3 では、多くの瓦片がまとまって見つかりました。三門は瓦葺きの建物であったことより、これらの瓦片は、葺き替えの際に廃棄されたものとも考えられます。

三門地区（南東から撮影）

Data

事業名	円覚寺跡 遺構確認調査
所在地	那覇市首里当蔵町 2 ー 1
調査面積	約 30 ㎡
調査期間	平成 28（2016）年 7 月 1 日～ 9 月 26 日



遺構全体図

三門地区　遺構検出状況（写真下が東）

トレンチ１　石列（北東から撮影）

トレンチ３　検出された瓦片（東から撮影）

県営首里城公園内 中城御殿跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

中城御殿跡の発掘調査は、県営首里城公園整備を目的として、平成 19（2007）年度より遺構確認調査が開始され、これまでに石造の側溝や石畳、石積み、階段、庭園の池などの遺構が良好な状態で遺されていることがわかっています。

平成 28（2016）年度は昨年度に引き続き、敷地内北西部の上之御殿と呼ばれる地区を対象に調査を実施しました。

中城御殿の概要

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、明治３（1870）年に、大中町に新御殿の造営が開始され、明治８（1875）年に移転します。そして、明治 12（1879）年の琉球王国の崩壊を経て、昭和 20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地に存在していました。戦後は一時、引揚者たちのバラックが建てられ、のちに首里市役所、首里バス会社の敷地として使用されましたが、昭和 40（1965）年に琉球政府により敷地が買い取られ、琉球政府立博物館の建物が新築されました。その後、博物館は昭和 47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称され、平成 21（2009）年に解体されるまで存在していました。

中城御殿跡位置図

平成 28 年度調査箇所（写真下が南）

Data

事業名　首里城公園発掘調査　　所在地　那覇市首里大中町１丁目１番地

調査面積　約 130㎡

調査期間　平成 28（2016）年 10 月 12 日～ 11 月 11 日

調査の成果

上之御殿と呼ばれる地区では、平屋の建物を中心に南側には庭園、東側には御嶽（うたき）が配置されていたとされます。平成 28 年度の調査では、調査区を 2 か所設置し、庭園と、中城御殿の周縁を囲む石牆（せきしょう）の遺構を確認するための遺構確認調査を行いました。

トレンチ 1 では、平成 27 年度の調査で見つかった庭園遺構の続き西側部分と、庭園遺構につながる石列を確認しました。石列は南北の外縁に走る石牆と並行して延びており、サブトレンチにて堆積状況を確認したところ、中城御殿当時の造成層直上に積まれることが確認できました。これらのことから、石列は南北の石牆の内側にあたる部分である可能性が考えられます。

遺物については、庭園遺構の客土（きゃくど）から、瓦、沖縄産、本土産の陶磁器類、釘などの金属製品類などが出土しました。

トレンチ 2 では重機による掘削（くっさく）を行いましたが、戦後から現代にかけての造成層が堆積しており、石牆の北側部分を確認することはできませんでした。石牆は、調査箇所より東側に存在する可能性が考えられます。

これらの調査成果については今後詳細な整理検討を行い、上之御殿地区の全体像を明らかにするための資料としていく予定です。また、平成 29 年度はトレンチ 1 で検出された石列の延長部分の調査を行う予定となっています。

トレンチ 1　全景（北西から撮影）

トレンチ１　石列（せきれつ）検出状況（北から撮影）

トレンチ１　石列（せきれつ）堆積状況（東から撮影）

白保竿根田原洞穴遺跡

旧石器時代（後期更新世）**～中森期**（グスク時代相当）

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

白保竿根田原洞穴遺跡は、新石垣空港建設工事に伴う分布調査により発見された遺跡です。平成22（2010）年度には工事にかかる範囲において緊急発掘調査を行いました。この調査で出土した人骨から抽出したコラーゲン（タンパク質）の年代を測定した結果、約2万年前とする結果が得られ、人骨から直接的に年代を測定したものでは国内最古として、関連する学会やマスコミの注目を集めました。

その他、遺跡からは約2万年前の旧石器時代から約500年前の中森期（グスク時代相当）までの遺物や堆積層が確認され、約2万年前には石垣島に人類が到達していたことを明らかにするとともに、洞穴が長期にわたり断続的に利用されてきたことがわかりました。このような重要な成果から、遺跡の中心部が空港の敷地内に現地保存されることになりました。

その後、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、平成24（2012）年度から平成28（2016）年度まで、文化庁の補助を受けて重要遺跡確認調査を行っています。

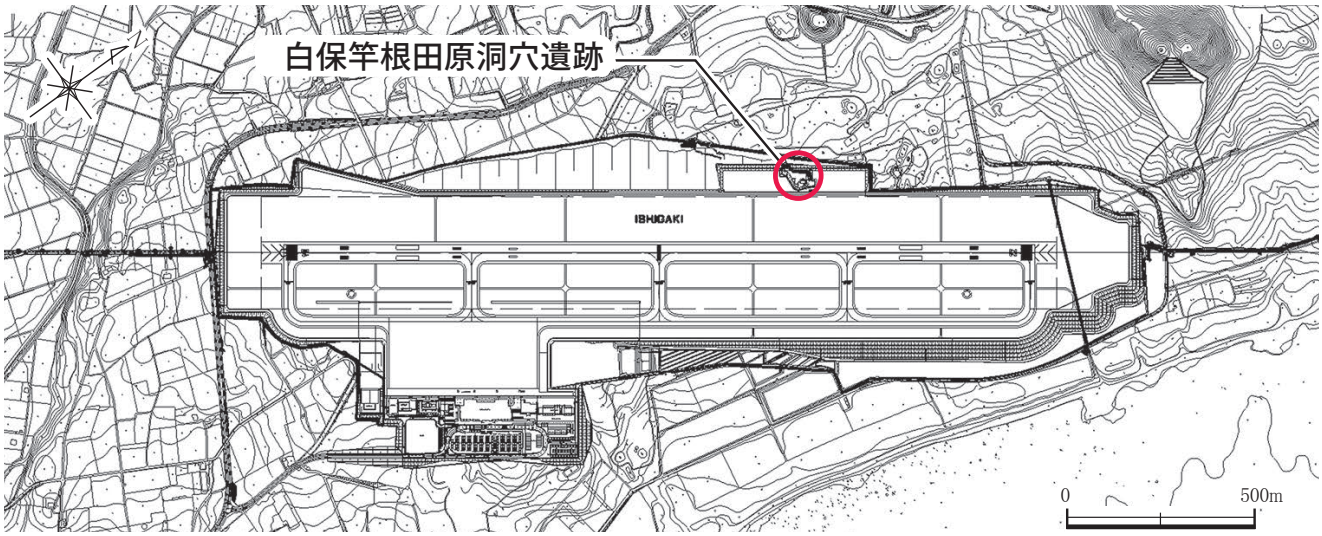
平成28（2016）年度は、6月末から7月初旬の2週間にわたり、H4区に残された人骨の回収および遺跡の3次元計測作業を行いました。この期間中には、遺跡周辺において石器として利用できる石材の分布を確認する目的で、西表島、小浜島で石器石材調査を行い、石垣市民向けに現地説明会を開催しました。

調査にあたっては、出土遺物の分析についての配慮や、出土状況の再検証が可能なように、検出や記録、取上げ、運搬、分析試料サンプリングに至るまで慎重かつ迅速に行うよう努めました。

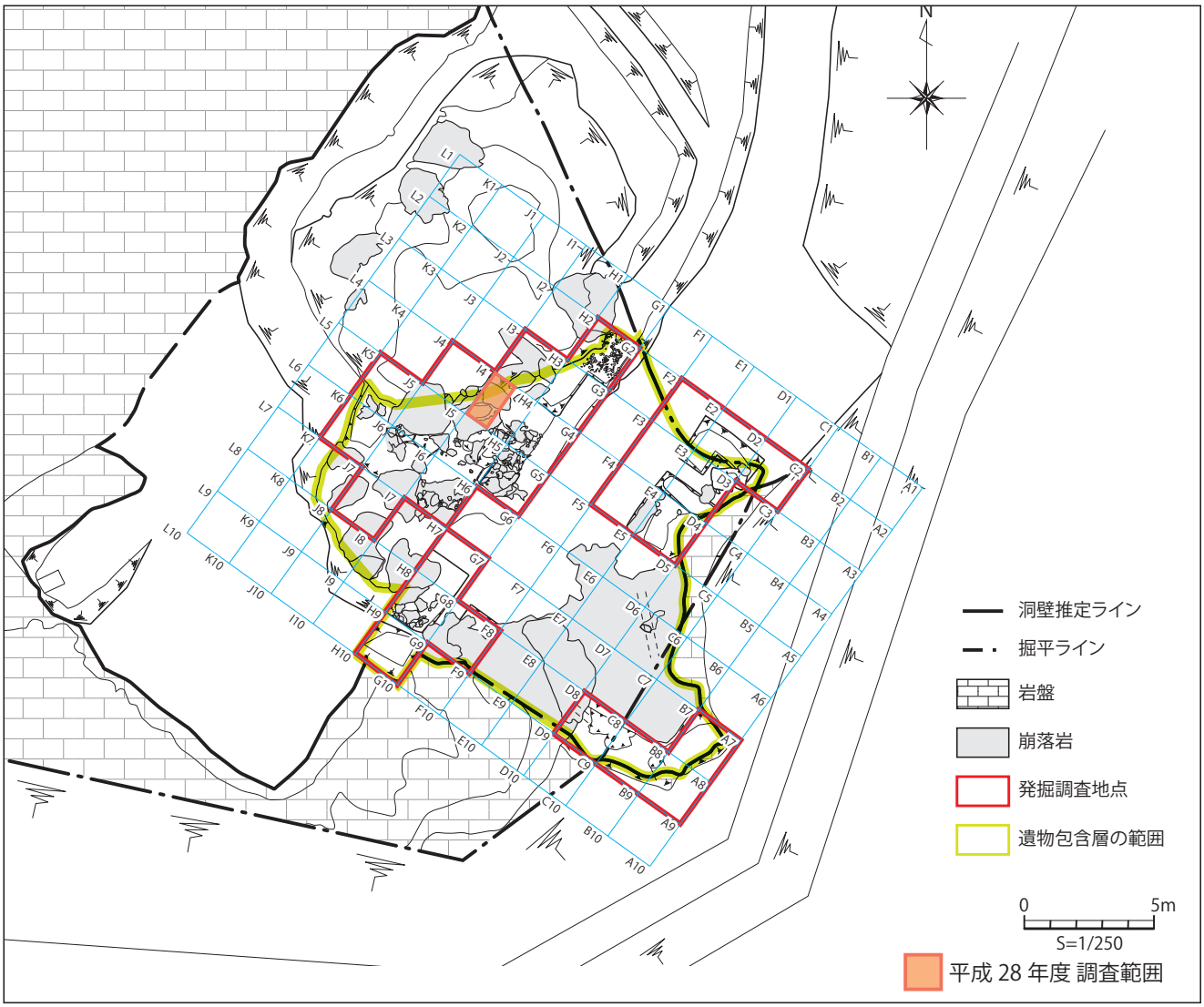
その結果、平成26（2014）年度から継続して調査を進めているH4区岩陰内のⅢE層（約2万4千年前BP）から、約90点の人骨片を回収し、人骨の最終的な点数は1,100点を越えることがわかりました。その後、資料整理作業とともに各種分析が進められ、骨の組み合わせによる個体識別から、少なくとも19人分の人骨が存在していたと推定され、中でも保存状態がよい人骨は白保1号～4号と名づけられました。

これらの人骨は、現地調査で出土状況や3次元の位置情報を記録しています。その検証から、5ヶ所に集中分布することが判明したため、そこから洞穴が人骨を安置した墓であった可能性が考えられます。また、人骨の表面には石灰質の付着物やネズミなどの動物がかじった痕が残ることから、長期間埋められずに地表に露出していたことがわかっており、遺体を埋めずに安置する「風葬」が行われていたと考えられます。この結果は、旧石器時代の葬送の様子が国内で初めて確認された事例として大々的に報道されました。

発掘調査はこれでいったん終了し、遺跡は現地保存されることになりますが、洞穴と遺跡の形成、人骨や動物骨、土器などに関する分析・研究は今後も続けられることになります。



白保竿根田原洞穴遺跡の位置



平成 28 年度 調査範囲

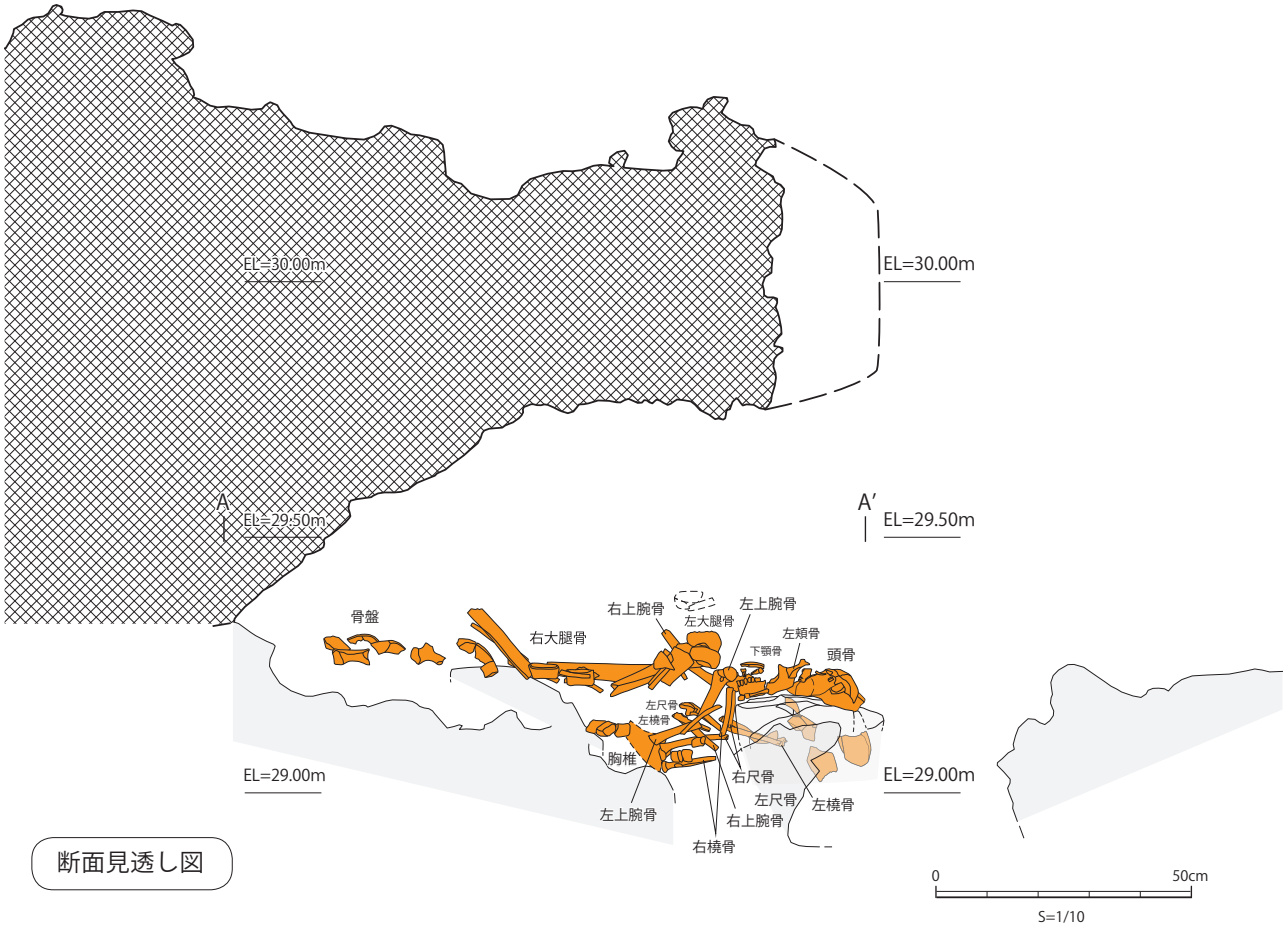
Data

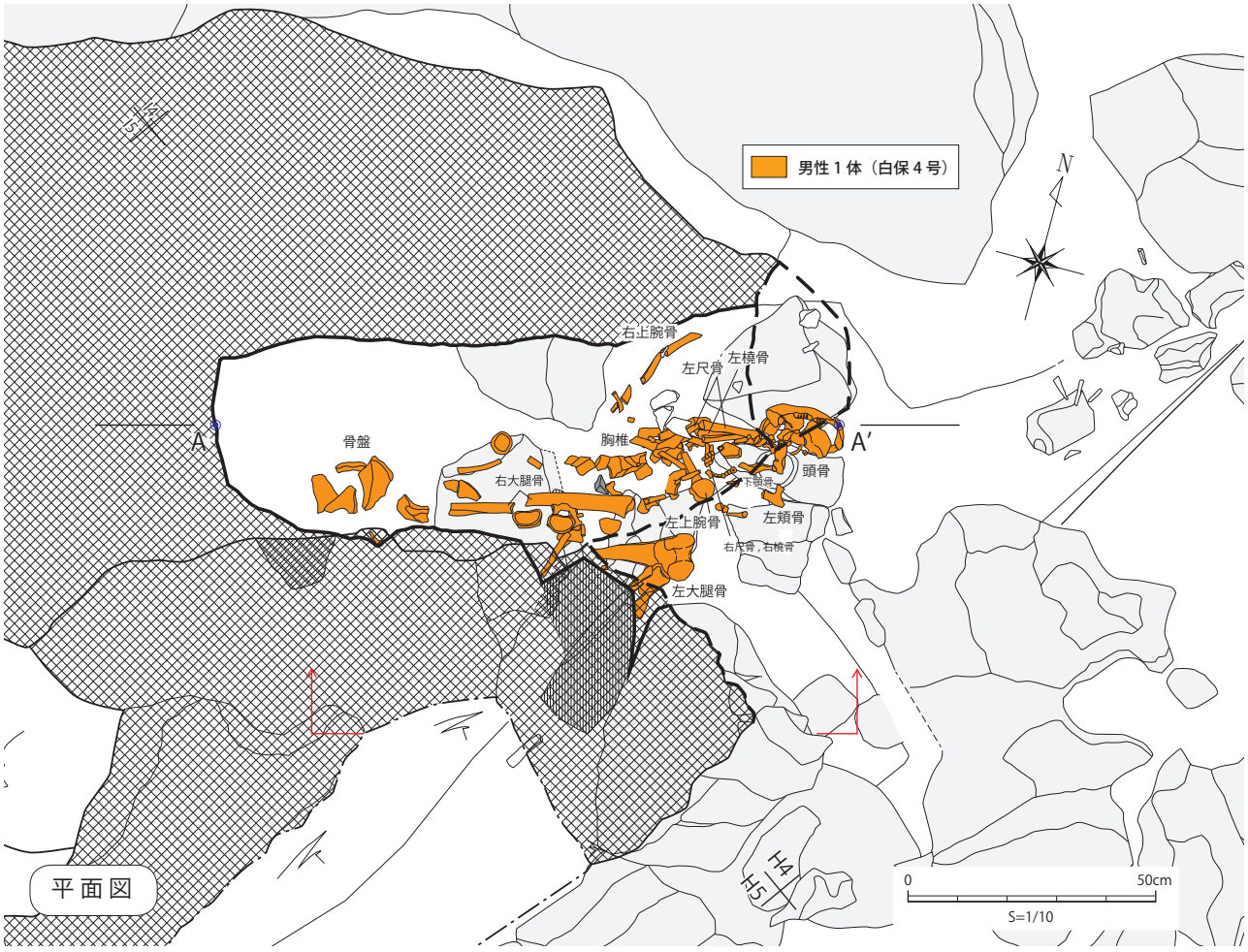
目 的　重要遺跡範囲確認調査

所 在 地　石垣市字白保（新石垣空港敷地内）

調査面積　約 2 ㎡

調査期間　平成 28（2016）年 6 月 27 日～ 7 月 8 日

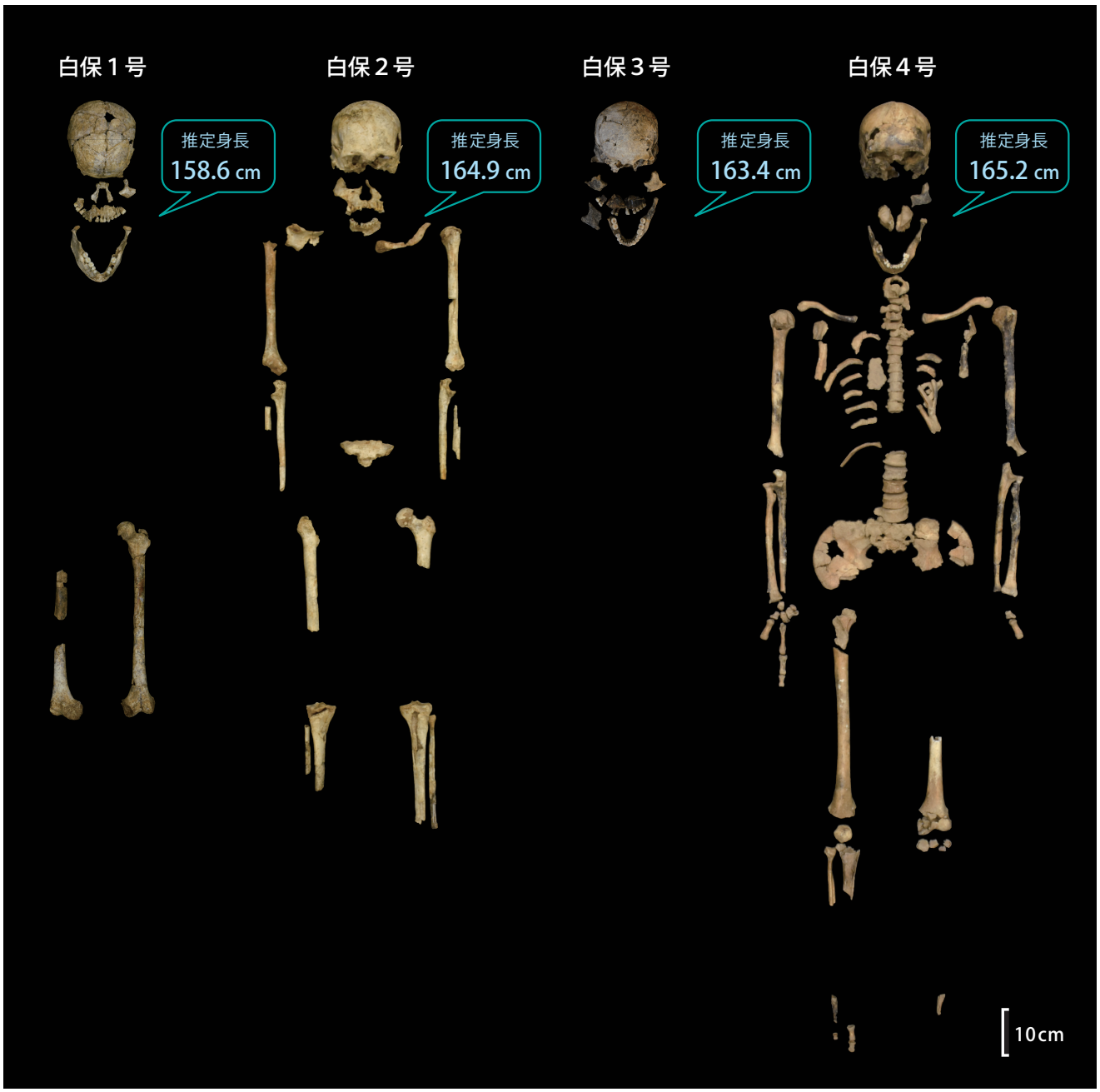




H4 区 III E 層　白保 4 号人骨出土状況　平・断面図

調査状況

H4 区　4 号人骨が眠る岩陰



白保 1 号～ 4 号人骨

藪地洞穴遺跡

縄文時代～弥生から平安並行期

調査主体：うるま市教育委員会

はじめに

藪地洞穴遺跡は、勝連半島の東北側に位置する藪地島にある洞穴遺跡です。昭和 35（1960）年に國分直一氏、嵩元政秀氏らによって初めて発掘調査が行われました。その時、約 6,500 年前の爪形文土器が発見されたほか、貝殻を加工して作った鏃などが発見され、沖縄の先史時代を研究する上で重要な成果が得られました。

最初の発掘から 50 年以上が過ぎ、遺跡の重要性を改めて確認するために平成 26（2014）年度から発掘調査を開始しました。今回の調査では、洞穴の入口付近と洞穴内部の発掘調査をしました。

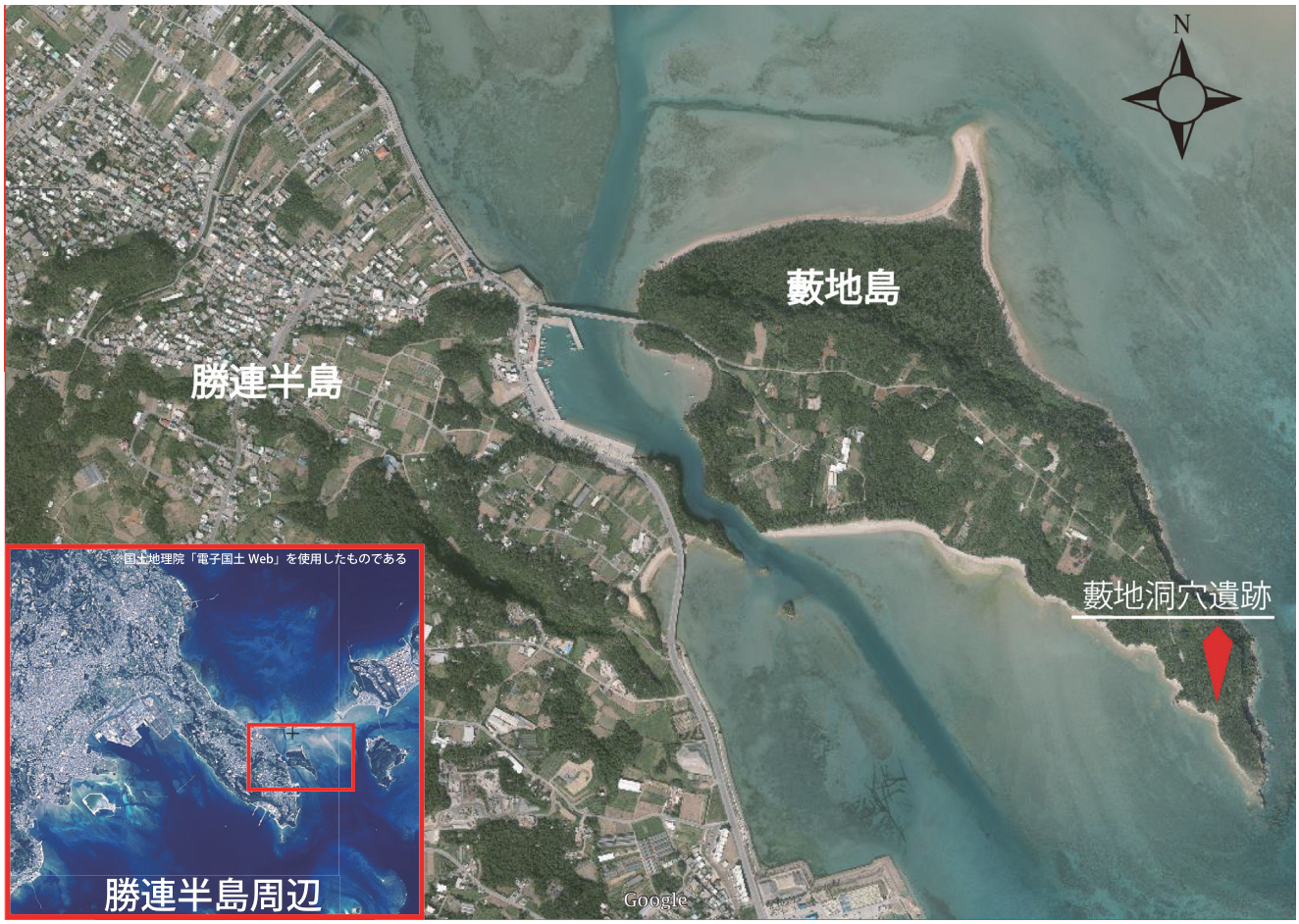


図１　藪地洞穴遺跡位置図

Data

目 的　試掘調査　　所在地　うるま市与那城屋慶名東藪地

調査面積　計 23.5㎡（TP1 ＝４㎡、TP ２＝４㎡、TP ３＝7.5㎡、TP ４＝４㎡、TP ５＝４㎡）

調査期間　平成 26（2014）年 11 月～平成 27（2015）年１月、平成 27（2015）年 ６月～９月
平成 28（2016）年６月～９月

図２　藪地洞穴遺跡前景写真

調査の方法

調査は平成 26 年度から平成 28 年度まで行い、洞穴前庭部から洞穴奥部に計５箇所のトレンチ（ＴＰ１～ＴＰ５）を設定し発掘しました（図３）。

発掘は地表面から人力で掘り下げていきました。洞穴奥部のＴＰ３については、地表面が地下水に含まれる石灰分が結晶化したフローストーンにより固く覆われていたため、削岩機（さくがんき）を用いて表層を割りながら掘り進めました。

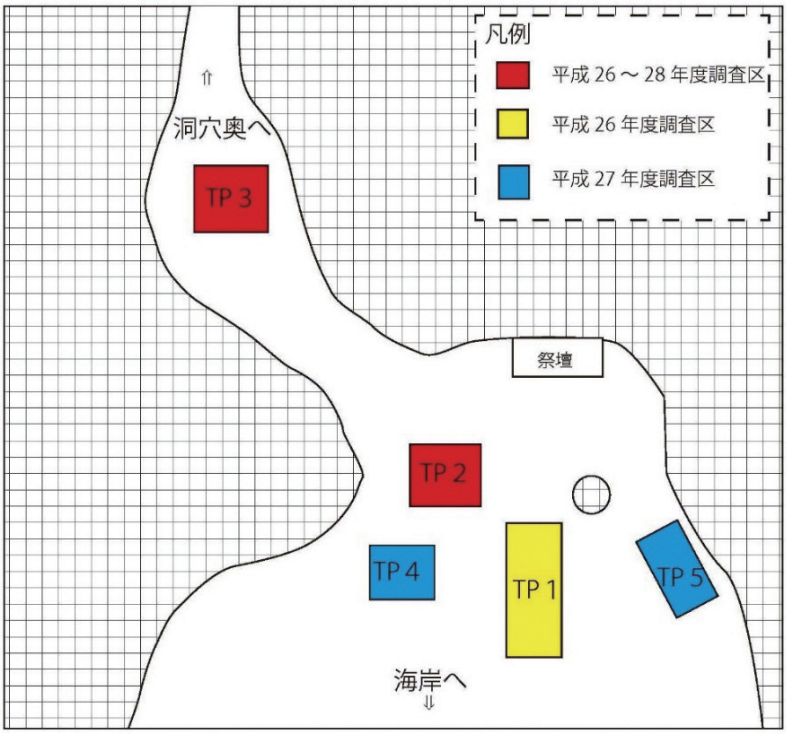


図３　試掘トレンチ位置 概略図

調査成果

調査した５箇所のトレンチのうち、大量の遺物が出土したＴＰ２とＴＰ３の成果について紹介します。

～調査区２（ＴＰ２）の成果～

洞穴の入口部分の調査区２（ＴＰ２）では、おびただしい量の約 6,500 年前の爪形文土器の破片が重なり約 10 ｃｍの層となって出土しました。また、同じ層からは局部磨製石斧（きょくぶませいせきふ）が４点まとまって出土し、貝の鏃やイノシシの骨などが土器に混じって出土しました。このような状況は、県内で事例がなく、どのような目的で土器片やそのほかのモノが集められたのかはわかっていません。今後、これらの謎を解明するために調査を進めていきます。

図４
遺物（爪形文土器、局部磨製石斧、貝の鏃）出土状況

図５
おびただしい量の爪形文土器の出土状況

～調査区３（ＴＰ３）の成果～

洞穴の奥にある調査区３（ＴＰ３）では、地表面を覆(おお)っていた固いフローストーンを割って掘り進めると、なかから土器片や貝殻が多数出土しました。土器は文様が無いものが多いですが、なかには波状文(はじょうもん)などの文様を持つものもありました。地表下約 70 ～ 80 ｃｍの層からは、貝殻やイノシシの骨に混ざって土器片も多数出土しました。この層の年代を測定したところ 9,000 年以上前の地層であることがわかりました。

このような年代の遺跡は県内には非常に少なく、この頃の生活の様子は全くわかっていません。今回出土した貝殻や骨、土器を分析することで、当時の人々が何を食べていたのか、どんな道具を使っていたのかなど生活の様子が少しずつわかってきます。

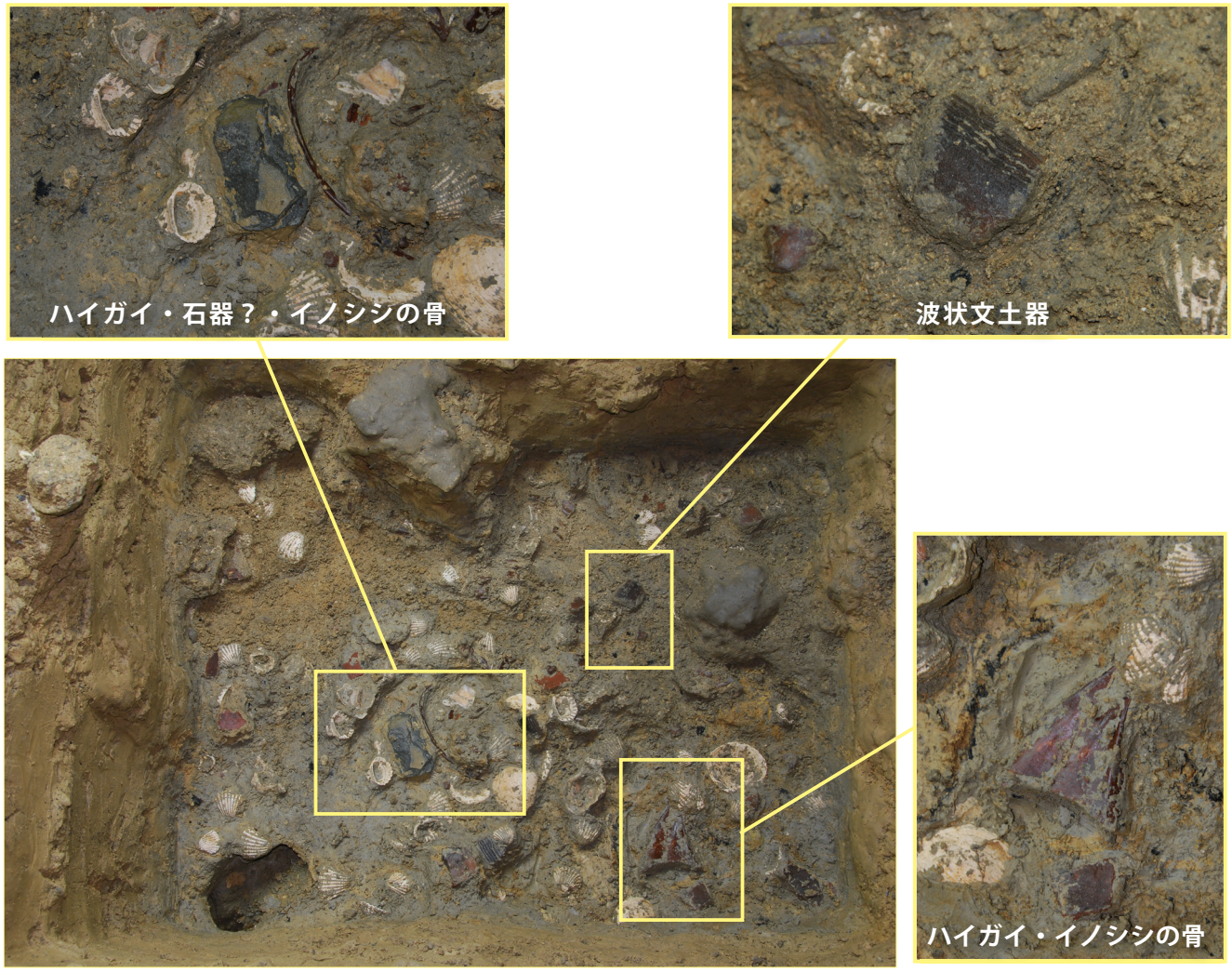


図６　ＴＰ３遺物出土状況

おわりに

今回の調査で、1960 年に行われた調査成果を再確認するとともに、洞穴の入口付近での爪形文土器が厚く堆積(たいせき)する状況や、奥部での土器や貝殻の出土など人の生活の痕跡(こんせき)を確認できたことは、新たな発見となりました。

当遺跡は、これらの貴重な発見があり、遺跡の重要性から平成 29 年３月 17 日にうるま市の指定史跡になりました。

ツヅピスキアブ

旧石器時代（後期更新世）**～近世**

調査主体：宮古島市教育委員会

ツヅピスキアブの発掘調査では、約10,000～20,000年前の層（Ⅳ-1・2層）と、約24,000年前の層（Ⅳ-3層）で人の生活の痕跡が確認されました。約10,000～20,000年前の層からは、イノシシの骨が多く出土し、シカ、ネズミ、コウモリなどの動物骨とともにチャート製の石器や人骨も出土しています。また、約24,000年前の層からも人が使用したと考えられる炭化物がまとまって検出される面があり、これらの時代に宮古島には人が存在していたことが明らかになってきました。

発掘作業風景

発掘作業風景

土層堆積（●の地層は約10,000～20,000年前、◆の地層は約24,000年前）

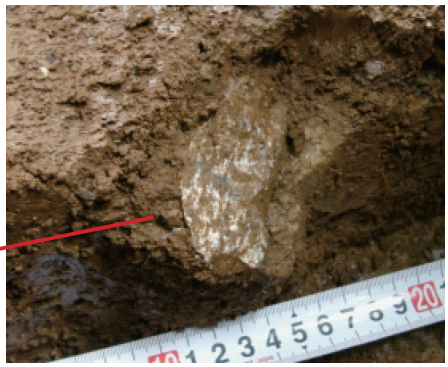
約24,000年前の炭化物の検出状況
棒の立っている場所が炭化物の出土位置を示します。

Data

目的	確認調査	所在地	宮古島市平良字下里嶺原1068番地
調査面積	18㎡	調査期間	平成21（2009）年～平成26（2014）年

Ⅳ -1・2 層（10,000 ～ 20,000 年前）の発掘状況

石器出土状況



石器２出土状況

遺物出土状況

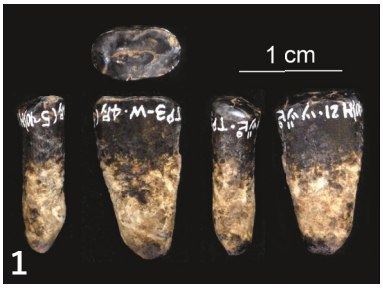
遺物の出土した場所に竹串をさしています。

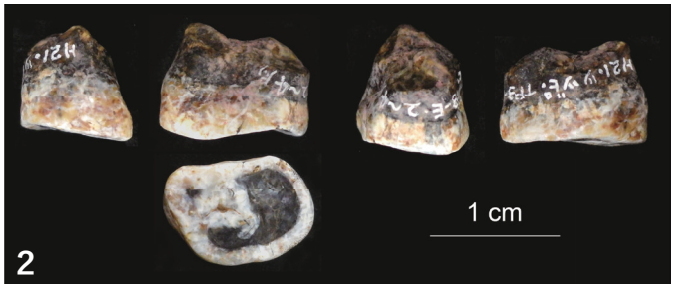
イノシシの切歯

チャートの円礫

動物骨出土状況

出土した動物骨は、歯が多く、骨の出土は少量でした。





◀ 人骨

2 点の人骨。
1 は前歯に近い部分の歯（上顎小臼歯（じょうがくしょうきゅうし））で、2 は奥歯（上顎大臼歯）になります。

▲ 石 器

1 ～ 3 は、チャートとよばれる岩石で、人為的に打ち割った加工がみてとれます。4 は、砂岩と呼ばれる岩石で、磨り石として使用されています。

チャートの円礫▶

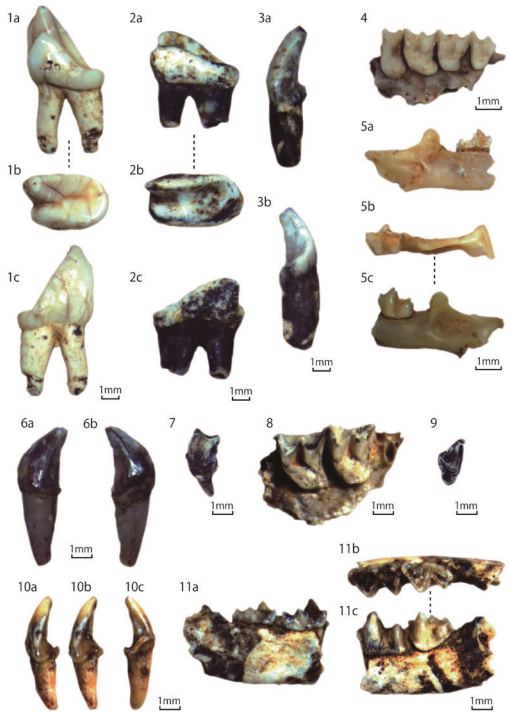
人的な加工は見られないものの、チャートの円礫が多く出土しています。

▲ シカ骨

シカ骨の出土量は少ないが、大型でミヤコノロジカと考えられます。

▲ イノシシ骨

イノシシ骨の出土の大部分は歯で、骨の出土は非常に限られていました。



▲小型動物（コウモリ）の骨

1 ～ 3：オオコウモリ属、4 ～ 5：キクガシラコウモリ属、6 ～ 11：カグラコウモリ属

県内出土遺物保存処理

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターの発掘調査で出土した遺物の中には、金属製品や木製品、石造物など時間とともに劣化（れっか）していく材質のものが含まれます。この事業では、これらの遺物について長期的な保存や公開等に利活用するため、化学処理を行っています。

対象資料と成果

平成 28 年度は、首里城跡正殿（しゅりじょうあとせいでん）地区から出土した青銅製品・鉄製品のうち、38 点の保存処理を実施しました。化学処理には専用の高額な機材や薬品が必要なため、専門とする業者に委託しました。

専門的なクリーニングと化学的な保存処理を行ったことで、耐久性（たいきゅうせい）が増し、長期的な保存や積極的な利活用ができるようになりました。

処理前　　処理後

鉄製兜鉢（かぶとばち）

梵鐘（ぼんしょう）

Data

目的　脆弱（ぜいじゃく）な出土遺物の保存処理　　点数　38 点

調査期間　平成 28（2016）年 7 月 27 日～平成 29（2017）年 3 月 31 日

保存処理の作業工程

①X線 透過撮影

②クリーニング

③安定化・脱塩(だつえん)処理

④樹脂含浸(じゅしがんしん)

⑤含浸後の乾燥

⑥樹脂塗布(とふ)

沖縄歴史年表

※1…沖縄本島時代区分　※2…八重山諸島時代区分

白保…白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）

西暦

前50万～前1万　前1万～前5,000　前4,000　前3,000　前2,000　前1,000　0　後100　後200　500

時代区分 ※1 ※2

旧石器時代

縄文時代：早期　前期　中期　後期　晩期

弥生時代～平安時代並行期

下田原期　無土器期

沖縄の様相

港川人が現れる
山下洞人が現れる
局部磨製石斧を使用
曽畑式土器が入る
土器の個性化が始まる
市来式土器が入る
貝・骨製の装飾品が作られる
丘陵上に集落を形成
海岸砂丘上に集落を形成
鉄などの弥生文物が流入
貝交易の盛期
シャコガイ斧がつくられる
先島無土器時代
丘陵上で生活するようになる

今回対象となる遺跡とその時代

ツツピスキアブ（宮古島市）
藪地洞穴遺跡（うるま市）
藪地洞穴遺跡（うるま市）
白保　白保　白保　白保

日本

旧石器時代

縄文時代：草創期　早期　前期　中期　後期　晩期

弥生時代：前期　中期　後期

古墳時代

中国

旧石器時代

新石器時代

青銅器時代：殷　周

春秋戦国　秦　漢　三国　晋　五胡十六国　南北朝

日本・中国の様相

北京原人が現れる
柳江人が現れる
局部磨製石斧を使用する
細石刃を使用する
土器製作が始まる
弓矢の使用が始まる
縄文海進が始まる
尖底土器を製作する
黄河文明が興る
仰韶（彩陶）文化が形成される
メソポタミアに都市国家が興る
海進が最大になる
平底土器を製作する
竜山（黒陶）文化が形成される
殷が都市国家の覇者になる
インダス文明興る
火炎土器を製作する
大規模な集落が形成される
ギザの三大ピラミッドの建設
青銅器文化が興る
貝塚の大規模化と土偶の増加
亀ヶ丘式土器文化が広がる
周が華北を統一する
BC 221 始皇帝による中国統一
弥生文化の成立
鉄器の使用が始まる
仏教の成立
BC 118 五銖銭が鋳造される
環濠集落の形成
AD 57 奴国王が金印をたまわる
このころ中国大乱と記される
このころ「ローマ」が最大版図
甕棺が盛期
AD 239 卑弥呼が親魏倭王の号をたまわる
このころ倭の五王による遣使
敦煌の石窟寺院の造営が始まる
前方後円墳の盛期
須恵器の生産が始まる
AD 538 仏教の伝来

黒字：日本
青字：中国
緑字：世界

西暦

600　700　800　900　1000　1100　1200　1300　1400　1500　1600　1700　1800　1900

時代区分 ※1 ※2

弥生時代～平安時代並行期　グスク時代：三山　第一尚氏　第二尚氏（前期）　第二尚氏（後期）近世琉球

沖縄県：近代　戦後

無土器期　新里村期　中森期　パナリ期

沖縄の様相

714 信覚・球美人らが帰朝する
このころ開元通宝が入る
751 鑑真ら阿児奈波島に漂着
土器が無文化するようになる
陶磁器・石鍋・カムイ焼の流通
農耕が広まる
1187 舜天即位と伝わる
1372 察度が明に入貢する
このころ首里城成立か
各地に大型グスクが現れる
1429 尚巴志による沖縄本島の統一
1453 支配・布里の乱により首里城焼失
1458 阿麻和利の乱
1477 尚真が即位
1500 オヤケアカハチの乱が起こる
1529 守礼門が建てられる
1609 島津による琉球侵略
1616 一六ら朝鮮陶工来琉
1660 首里城が失火により炎上
1682 壺屋への窯場統合
1709 首里城が失火により炎上
1799 識名園の創設
1879 琉球処分
1933 首里城の解体修理が行われる
1945 沖縄戦
1972 日本復帰
1992 首里城正殿が復元される
2000 首里城跡などが世界遺産に登録

今回対象となる遺跡とその時代

西普天間住宅地区（宜野湾市）
真珠道跡（那覇市）
円覚寺跡（那覇市）
中城御殿跡（那覇市）
白保

日本

古墳　飛鳥　奈良　平安　鎌倉　南北朝　室町　戦国　安土桃山　江戸　明治　大正　昭和　平成

中国

隋　唐　五代十国　宋　金　元　明　清　中華民国　中華人民共和国

日本・中国の様相

607 隋の大運河の建設が始まる
621 開元通宝の初鋳
630 遣唐使の派遣始まる
唐の領土が最大版図となる
710 平城京へ遷都
794 平安京へ遷都
天平文化が形成される
894 遣唐使の停止
このころ景徳鎮窯が開かれる
国風文化が形成される
このころ竜泉窯が開かれる
藤原氏の全盛
このころ羅針盤・火薬の発明
1126 靖康の変が起こる
源平の対立
陶磁器の輸出が盛んになる
1274・81 モンゴルの襲来
景徳鎮で青花が完成する
前期倭寇の盛期
後期倭寇の盛期
1467～77 応仁の乱
1492 コロンブスがアメリカへ到達
ルネサンスの最盛期
明の赤絵が発達する
有田で磁器をつくり始める
1639 鎖国令が出される
元禄文化の形成
清の領土が最大版図となる
1789 フランス革命勃発
1840 アヘン戦争
1894～18 日清戦争
1914～18 第一次世界大戦
1939～45 第二次世界大戦
1972 日中国交正常化・世界遺産条約制定

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。

「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく３つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価をおこなうための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなる遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりがありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないわけですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては発掘調査を実施している市町村教育委員会、
若しくは以下にお問い合わせください

〇沖縄県教育庁文化財課　記念物班　埋蔵文化財担当　TEL 098-866-2731

〇沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班　TEL 098-835-8752

発掘調査速報展 2017

■主 催
沖縄県立埋蔵文化財センター
■共 催
うるま市教育委員会
恩納村教育委員会
宮古島市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター
発掘調査速報展2017
発行日：平成 29（2017）年 8 月 1 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098-835-8751　FAX 098-835-8754
ＨＰ　http://www.pref.okinawa.jp/edu

関連文化講座のご案内

発掘調査速報 2017

会 場：当センター研修室

定 員：各 140 名　予約不要／参加無料

2017 年 8 月 5 日㊏ 13：30 ～

- 西普天間住宅地区〔宜野湾市〕
- 真珠道跡〔那覇市〕
- 大嶺村跡〔那覇市〕
- 円覚寺跡〔那覇市〕
- 中城御殿跡（旧県立博物館）〔那覇市〕

2017 年 8 月 12 日㊏ 13：30 ～

- 白保竿根田原洞穴遺跡〔石垣市〕
- 藪地洞穴遺跡〔うるま市〕
- ツヅピスキアブ〔宮古島市〕

次回の催し

沖縄の先史時代展（仮）

2017 年10 月 24 日㊋～11 月 26 日㊐

首里城京の内跡出土品展

2018 年 2 月 20 日㊋～5 月13 日㊐

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL：098-835-8751

【開所時間】午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

【休 所 日】月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日は開所）、年末年始　※月曜が祝日の際は翌火曜も休所